

助動詞の本動詞説と独立範疇説のゆくえ

The Autonomy Hypothesis and the Main-verb Hypothesis

佐藤吉文

I はじめに

助動詞が助動詞として独立して存在する (the autonomy hypothesis) か本動詞の一部である (the main-verb hypothesis) かは、議論のつきないところである。また、助動詞も言語である以上、生きている存在であるから、その性格や用法が変化してくることは理の当然と考えるべきである。こうした中で、我々は、文法化 (grammaticalization) や認知的アプローチの存在も考慮に入れなければならないと考える。議論の中での資料は、Heine (1993) を追検証したところによるところが多い。本論は、助動詞の理論的設定を目指すものではなく、これまでに論議されてきた助動詞の諸説を議論しながら今後の助動詞研究の方向性を考察していくものである。第1章・第2章では助動詞の Autonomy 説と Main-verb 説との対立を示しながら、助動詞をどう定義していけばいいのかという問題を投げかけている。第3章は、can の肯定平叙文における認知的用法の存在を証明し、文法化が助動詞に現在も起きていることを示唆する。第4章では、第1・2の議論の助動詞の二重性格 (動詞的性格と助動詞本来の性格) が文法化によって説明がつくことを論じている。また、そのことが第3章によって実証される結果にもなっている。

1. 助動詞の Autonomy 説と Main-verb 説

助動詞の助動詞本動詞説 (main-verb) と助動詞独立範疇説 (autonomy) とは結論を得ないままにさらに混迷を深めている感がある一方で、全く別の観点から助動詞を捉える動きが出てきていることも確かである。助動詞が本動詞とする説の根本的な立場は、助動詞と動詞を同一範疇とするものである。助動詞独立範疇説の方は、助動詞の概念は文全体を作用域と考えるべきであり、動詞のような語彙範疇に所属するものとは同一視できないとするものである。

1.1 助動詞本動詞説

中右 (1996) は、助動詞を本動詞として位置づけている。助動詞が本動詞とする説の根本的な立場は、統語論的に助動詞を動詞の範疇とは区別しないで、一般に助動詞と呼ばれているものを動詞の上位に位置する助動詞と動詞を同一範疇とするものである。そして、その論拠として以下の1~3のように結論づけている。

1. 助動詞の本動詞説を裏付ける第一の論拠は、否定形テンスの分布に関して助動詞と本動詞が完全に平行しているという事実観察から得られる。

- 1 a. He *continued singing*.
- 1 b. I smelled onion *cooking*.
- 2 a. I *remember going* to the concert.
- 2 b. She *loves having* breakfast in bed.
- 3 a. He *is always grumbling*.
- 3 b. I *am seeing* my dentist *this afternoon*.

(1)は現在分詞の例で(2)は動名詞の例である。(3)は進行形 be V-ing の例である。中右 (1996) は(1)(2)(3)の中で(3)だけが別扱いにされる理由はどこにもないとしている。統語的な平行性はもとより、(3 a)は「彼はいつも不平ばかり言っ

ている」という意味になるから copular の be 動詞と変わることなく、意味論的にも(3)の be を助動詞として別扱いする理由がないというものである。同様に、中右 (1996) は次の論拠もあげている。

2. 否定形テンス en を含む過去分詞について、一般動詞と助動詞の平行性が見られる。
3. 不定詞の場合に置いても、一般動詞と助動詞の平行性が見られる。

しかし、be 動詞が本動詞であるという解決がこれですついたにしても、助動詞全般が本動詞と同じ範疇に属しているということにはならない。むしろ、論拠からすれば、be 動詞は本動詞として扱われるべきであると結論づけた方が妥当である。他の助動詞についてまで一般化するには助動詞の概念から言っても無理があると考えられる。

Ross (1969) もまた、英語の助動詞と動詞は同じ語彙範疇に属すると論じている。すなわち V 範疇に所属し [+V] の組成を持つとしている。しかし、Ross は、英語の have や be を他の一般動詞とは区別し、have や be に対しては [+AUX] の組成を与え、一般動詞に対しては [-AUX] の組成を与えている。この他に、助動詞を本動詞とする立場の研究者の代表的なものは以下の通りである。

McCawley (1975), Keyser & Postal (1976), Hudson (1976), Huddleston (1976b), Pullum & Wilson (1977), Mufwene & Bokamba (1979), Pullum (1979), Gazdar, Pullum & Sag (1980), Pullum (1981), Schachter (1983). 本動詞説をとる研究者らは、英語においても他の言語においても AUX 範疇を設定することはいたずらに議論を複雑にするばかりだと主張している。

助動詞本動詞説を採る中で考えていかなければならないことの一つは、助動詞と本動詞との統語的・機能的関係である。特に、下位区分と依存の概念である。本動詞説の立場は、Huddleston によってもっともはっきりと説明されている：

Auxiliary verbs are precisely those verbs which do function as dependent in VP structure, and are contrasted with main verb, which function as head. (Huddleston 1984: 128)

すなわち、助動詞は VP 構造内で依存的に機能する動詞あり、本動詞とは対照的に VP の主要部として機能するとしている。同様に Crystal (1980) では、助動詞の従属的地位 (subordinate status) は、助動詞に適用される二つの定義的基準であり、その二番目の基準は MOOD、ASPECT、VOICE の区分を補助することであるとしている。Palmer (1979 b) は本動詞が動詞の主要部に位置し助動詞は修飾部に位置するとしている、なぜなら、選択制限が主要部名詞と主要部動詞との間に非常に大きくかかわっているが、形容詞と助動詞との間の選択についてはおおきな関わりはないからとしている。

依存モデルを用いていないが、関連する考え方が Langacker (1991) によってされている：すなわち彼は content structure と grounded structure の間の区別に関して説明している。時制や法性に関係のない動詞群は content structure と定形節の主要部として言及されている。注目すべきことは助動詞は Langacker によては単位的な文法成文としては扱われていないことである。むしろ彼は助動詞を時制と法性に分ける一方で残りの助動詞を節の主要部を形成する本動詞と結びつけている。一方、Anderson (1973) は英語の助動詞が直接に支配する別の V 派生の中に来る V であるとしている。そして最近の生成文法の体系の中では、機能的範疇 INFL が、人称・性・数といった複合的要素 AGR 同様に、時制や法性のような要素を含むとしている。この範疇は独自にその補部として VP を選択し、VP は INFL の補部のみになりうる。すなわち、二つの範疇には相互独自性の関係が存在するものである。

Palmer (1983) は、「助動詞本動詞説は論理的モデルに非常に依存している」と述べている。この助動詞本動詞説に対する Palmer の批判は当たっていると思うが、この批判は助動詞独立説を主張する議論にも言えることだと考える。従来の研究者の諸説が理論的枠組みに基づきそれに縛られながら議論しなけれ

ばならないことから容易に判断できる。

1.2 助動詞独立範疇説

助動詞が本動詞と独立した範疇に所属するという考え方も多くの研究者によって主張されている。この立場を主張する主な研究者は以下の通りである。

Puglielli (1987), Jackendoff (1972), Lightfoot (1974), Steele (1978), Akmajian et al. (1979), Palmer (1979b, 1986), Steele et al. (1981), Jelinek (1983), Marchese (1986), Ramat (1987)

助動詞が独立した範疇とする考え方の中に、助動詞を普遍的な範疇と考えている研究者がいる。Akmajian et al. (1979) や Steele et al. (1981) は、二つ以上の異なった言語間で助動詞と動詞が区別されていることが認められることを根拠に AUX を普遍範疇 (universal category) として位置づけている。そして、助動詞の普遍性を当然のこととする研究者たちの中には、助動詞がすべての言語の特徴と考えている者達もいる。そのような研究者達は、いかなる言語にも適用される広い助動詞の定義を採用するか助動詞の存在を理の当然とした前提とする理論を採用するかのいずれかか、その両方かである。他方では、すべての言語についてではないが、大部分については助動詞が普遍的人類の能力として受け止めている者達もいる。しかし、大部分の場合、*universal category* という用語が正確に何を意味しているのかを確立することは不可能であり、研究のゆれに表れてきている。つまり、「すべての言語が AUX 範疇を持っているとは限らない」という点に関して、AUX のゼロ表現などという無意味な定義がなされていっそうの混乱を招く結果となっている。

Steele (1978) は、助動詞は文全体を作用域とする時制・相・法性といった概念を含む範疇として一般動詞とは独立して存在するものとして考えている。また、Palmer (1979 a ; 1979 b) も同様の立場をとるが、彼は、英語における助動詞の統語的性格は本動詞の統語的性格とは同じに扱われないと説明している

だけある。Matthews (1981) は、助動詞の意味と用法は文法的次元で取り扱われるべきものであり、本動詞は語彙範疇として取り扱われるべきものであるとしている。

Chomsky (1957) や Akmajian (1979) らの支持者にによって主張または示唆されていることがある。統語的範疇 AUX や VP はそれぞれ成分を連結する同格の構造を形成する同一の統語的レベルであるとしている。Steele (1978) は範疇 AUX の構成のための基準的性質はそれらが本動詞を従属しないということであるとしている。彼女は法助動詞に後接する英語の不定詞表示 to の欠如が節の欠如を意味しているばかりでなく、本動詞が助動詞の下位に来ないということも意味している。注目すべき点は、この説を支持している大部分が依存文法というよりはむしろ句構造を根底にしたモデルを通して議論している。しかし、一つだけ注目すべき例外がある：依存構造モデル用いているのだが、Hudson (1976) は助動詞は本動詞と同じ統語的レベルに属していて、その二つは姉妹として扱われると主張している (Chomsky は従兄弟としているのが)。Hudson の枠組みの依存性は「姉妹」間の関連性について関心を持っている：動詞の連続の中では、それぞれが前の動詞に依存している。それゆえ(4)の例文では四つの「姉妹」があつて、前の3つが助動詞 (may、have、been) であり最期の swimming はそうではない。may 以外のそれぞれの「姉妹」は前の成文に依存している。

4. John may have been swimming.

1.3 本動詞説でも独立範疇説でもない議論

助動詞の本動詞説と独立範疇説に対して、いくつもの代替案が提案されている。その一つに、助動詞漸次説 (gradience) を主張する研究者がいる。この立場では、助動詞と本動詞との間の境界線がないとするものである。そして、その研究領域の一つは Givon (1989) で代表される文法化 (grammaticalization) に関連するものであり、もう一方は Bolinger (1976) の漸次説 (gradience) の立場をとるものである。これらの立場に共通しているのは、助動詞の性格を共

時的な立場からだけとらえようとするのではなく通事的な立場からも説明していこうとするものである。Coates & Leech (1980) では英語の諸用法に対して純粹な通事的漸次モデルを使って説明している。また、助動詞独立範疇説対助動詞本動詞説が不十分な理論的根拠に基づいているとし、一つの範疇を決定するに当たって、違った観点を採用する不適切さがあると指摘する研究者達がいる。たとえば、Langacker (1978) は「全体的な問題は、一方では SENTENCE、CLAUSE、PROPOSITION、他方では MAIN VERB、VERB、PREDICATE」という概念をもつ生成文法内の生来の混乱に由来している結論づけている。

Kaisse (1981) は「Akmajian とその支持者によって議論されたルイセニョ詞の統語的・音韻論的ふるまいは、Akmajian によって意図された意味での明確な AUX 範疇というよりはむしろ、clitics の普遍的性質である」ということを証明している。すなわち、助動詞は、ある言語では言語学的範疇として捉えられる単位であるがすべての言語でそうであるわけではないことである。たとえば、Jenkins (1972) は英語とドイツ語の統語的違いは法動詞がドイツ語では本動詞に属するのに英語ではそうではない点であると指摘している。Abraham (1992) は、ラテン語、ギリシャ語、初期ゴート語、古代高地ドイツ語は助動詞を持たない言語として挙げている。また、Green (1987) はスペイン語に関して「もし助動詞が語彙的意味を持たない時制・相を示す文法的記号として定義されたなら、スペイン語には助動詞はないことになる」と指摘している。以上の点から明らかなことは、ある言語が決定的に助動詞を持つかどうかは定義の仕方次第によるということである。

Gleason (1955) は、can、could、will、would、shall、should、may、might、must が明らかに英文法内に位置されるべきものであり、それが助動詞の下位範疇として扱われるか、動詞補助として関連する独立範疇として扱われるかは重大な問題ではないとしている。独立範疇説を唱える Palmer (1983) すらがこの問題ははっきりと割り切れる問題ではないとしていることに注目すべきである。Palmer (1979) は、この問題は助動詞が本動詞であるかどうかであるかという問題ではなく、助動詞がどういう種類の動詞であるかということである、そ

して、助動詞とは本動詞とはかなり異なった種類の動詞であると結論づけている。同じような考え方しているのが Schachter (1983) と Dik (1983) である。Dik (1983) は、英語の助動詞 *have* と *be* は両方とも屈折の仕方においては動詞に一致しているが、本動詞は語彙目録に由来しているのに対して、助動詞は表現規則を通じて導かれると主張している。

また、形式上定義されるかどうかという異なった言語間の統語的同値というよりは、むしろ同一範疇に属しているかどうかという普遍的妥当性のみを提案している研究者達がいる。これらは Chomsky (1981) によって確立された GB 理論を研究している研究者である。関連する範疇は、助動詞または AUX としてではなく屈折 INFL として定義づけられる。節が定形か不定形かを特に示す INFL は一連の複雑な要素としてとらえられる。また、INFL は助動詞や AUX よりも包括的な範疇である。助動詞の概念と INFL とを結びつけるものは INFL が時制と法性から構成されているという事実である。しかし、加えて INFL が人称・性・数という組成を有しているという概念とは異なっている。これらの三要素は Chomsky に AGR と呼ばれているものに相当する。Gazdar et al. (1980) は「他の範疇と区別される範疇 V_n を持つ句構造がある」という仮説を立てている。そしてこれは Chomsky の提案する AUX 範疇として分析される提案と一致する。V は範疇を示し n は V の規則定義化された下位範疇を特定している。

範疇が統語的または他の成分から成り立っていることに従って、成分分析をよりどころとする研究者達がいる。そのような研究者は、分類全体の中の類似をとらえるのに組成に基づいた分析がより適切であるとしている。典型的例は Radford (1988) の例があり、「major categorial features [V] と [N]」と「minor categorial features [AUX] と [M]」との対比を組成成分として使って助動詞と非助動詞との区分ばかりでなく法性と非法性との区別もした。以下のような四つの分類を得ている：

- | | | |
|-----------------------|----------------|----------------------|
| a. Auxiliary verbs | [+V, -N, +AUX] | e.g. <i>be, will</i> |
| b. Nonauxiliary verbs | [+V, -N, -AUX] | e.g. <i>want</i> |

c. Modal auxiliary verbs [+V, -N, +AUX, +M] e.g. *will, can*

d. Nonmodal auxiliary verbs [+V, -N, +AUX, -M] e.g. *be, have*

同様に、Gazdar, Klein, Pullum and Sag (1985) は、助動詞を認めて AUX を定義した。Hudson (1976) は助動詞は本動詞であるとして、助動詞と動詞の違いは基本的に二つの組成 [Aux] と [transitive] によって示されるとした。たとえば、英語の(1)(2)の *have* 組成 [+transitive] という点で共通性を持つが、(5)は [-Aux] という組成を持ち(6)は [+Aux] という組成を持つという点で両者は異なることになる。(7)は [-transitive] の例である。

5. Do you have a light?

6. Have you a light?

7. Have you seen him?

Langacker (1978) はこの組成分析法の主な弱点は、組成 [AUX] が場当たり的で、AUXILIARY の概念を解明していないで表示していると言っている。

また、助動詞を処理する提案として用いられてきた他の折衷案がある。Jackendoff (1977) と Emonds (1978) は、英語の進行形の *be* を主動詞として扱い、完了の *have* をその S や VP の範囲を限定しない動詞として扱っている。そして法助動詞を非動詞(すなわち AUX のような存在)としている。これらの折衷的な立場をとる研究者の大部分は、動詞のような振る舞いをする助動詞とそうでない「pure auxiliaries」と呼ばれる助動詞間の二要素分類をしてきた。

しかし、同時に、折衷案にはそれなりの問題もある。Vとしての *be* や *have* と、AUXとしての *may* や *will* のような法助動詞との区別をする Akumajian et al. (1979) による提案は、次の(8)の *be* や(9)の *will* のような例の品詞の振る舞いを考えるとき、概念的でもない直感的でもない強制であると思われる範疇化を連想させてしまう。

8. She is coming.

9. Do it as you will.

最後に、大部分が見過ごされてきている別の問題に触れてみる。今まで見て

きたように、助動詞の広く受け入れられた性格の一つは助動詞が主動詞と同じ用法を持っているということである。したがって、has は(10)のように助動詞として用いられる場合もあれば(11)のように動詞として用いられる場合もある。

10. Linda has left.

11. Linda has a dog.

have のように英語で動詞と非動詞の同時的共起を折衷するような提案が論文で述べられるようになり、それらの大部分は説明上または用語上の便宜的手段に帰するといっても良い。本動詞仮説の支持者にとって、(10)(11)は本動詞として分析されるから、このことは当惑するようなことではない。すなわち、他方、助動詞独立範疇説を擁護する者達は、ふつうは(10)のように助動詞として用いられる場合もあれば(11)のように動詞として用いられるという立場をとる。しかしながら、第三の立場で、両者とも助動詞とする説がある。Schachter (1983) は、両者とも二助動詞であると主張し助動詞に多数の例を挙げている。第三の立場は、本動詞と助動詞は、依存—主要部、機能—項、operator-operand、controlled-controller という関係である。すなわち、両者は助動詞が本動詞の主要部であるという階層的順序になっている (Anderson 1973; Edmondson & Plank 1976; Schachter 1983; Hudson 1987)。事実、それらの主要部の地位は助動詞の限定的な性質の一つであると考えられている。

これまで論じられてきていることは、すべて助動詞が有する要素の多様性によって引き起こされてきていることである。それらの一つは形態統語論的論理と意味論的論理の間の不十分な違いに関連している。たとえば、Mufwene (1991) は次のような結論に達している：「動詞が助動詞として認識されるとき、典型的に、それは統語的に動詞の上位にあるが意味論的には主要部としてではなく修飾部として解釈される」。事実、依存性モデルの説明を用いている研究者達は、助動詞が主要部で本動詞がそれに依存しているという結論に到達している。一方、代替のモデルを使っている研究者達は、特に句構造に依存している人たちは、より代替的な解決を提案している。そこで、我々は、助動詞の依存

性構造が特定の言語に対してなのか普遍的に定義されるパラメーターなのかということに疑問を持つことになる。暗示的にも明示的にも助動詞の地位に関する多数の矛盾がこの問題に関連していることはこれまでの議論を通して確かである。そして、結局のところ助動詞とは何かという問題に立ち返ってしまうことになる。

2. 助動詞とは何か

2.1 概念

助動詞の形態論的・統語論的見地からの分類と共に、その概念構造についても議論の分かれるところである。多くの研究者らが時制・相・法性の機能を表す要素として助動詞という用語を使う傾向にある。しかし、助動詞の用法に関連する概念的領域の正確な範囲に関して各研究者に大きな隔りがある。たとえば、Steele (1980) や Steel et al. (1981) は、時制・相に加えて AUX 範疇に含まれる概念を否定・断定・疑問・強調・主語一致・目的語一致または明白性としている。そしてヨーロッパ言語の文法的扱いの中で態の文法的区別は通常助動詞の用法に関連したものであるとしている。時制・相・法性が助動詞表現の中核的な領域を構成していると言えるかもしれないが、この点に関しては、多くの学者の異なった研究成果があることも確かである。たとえば、Akmajian et al. (1979)、Steele et al. (1981)、Langacker (1991) は AUX 範疇の定義の中で時制と法性の概念的領域にのみ言及している。一方、Pullum and Wilson (1977) は英語助動詞の中で法性と相は論じているが時制は論じていない。さらに、ある研究者の中には法助動詞が助動詞の中核的な助動詞であるとし、他の要素については助動詞の考慮から除外している。Long (1961) は have と be が本当の助動詞で法助動詞は本動詞だとしている。

以上のことは、結局また、次のような疑問を投げかけることになる。

1. 三つの概念的領域のいずれのものも他の要素よりも深く現象に関連しているのか？

2. もしそうだとするなら態や否定といった他の領域はどのようにして考えるべきなのか？

そして、さらに言えることは、どの立場をとるにしろ、自分たちが採用している理論的枠組みを成立させるために、助動詞そのものの概念に対してもねじれを持たせている結果になっている。つまり、概念構造にも当然のことながら階層構造があると考えるべきであるが、それが、統語的概念構造と一致しているかどうかは別問題である。それを無理矢理に統語的階層構造の正当性を証明するために、助動詞自体が持っている概念を都合良く取捨選択することは我々が目指すべき態度ではないような気がする。

2.2 定義の仕方

Heine (1993) は、助動詞の定義の仕方について次のような論理を展開し疑問を投げかけている。

助動詞の多くの研究者達をとらえている別の疑問は助動詞の両生的性質に関係している。たとえば、次の例文で *need* はどのように解釈されるのであろうか。

12 a. There needs to be more light in this room.

b. There need not be more light in this room.

(12 a) (12 b) の *need* は同じ範疇に属しているのであろうか異なった語彙として扱わなければならないのだろうか。(12 a) は不定詞標識のついた本動詞でかつ通常の本動詞とかわらない振る舞いをするし、(12 b) は不定詞標識のない欠如配置であり否定極性の環境内でのみ起こる (Pullum & Wilson 1977)。もし、(12 a) (12 b) の *need* が同じ範疇に属するなら、英語の共時的文法の中で、どのように形態統語論的違いを説明するのであろうか？ もし、それらが同じ範疇に属していないとするならどのようにして形式上や意味上の類似性を説明するのであろうか？

Akmajian (1979) は (12 a) の *need* は動詞の屈折を示すので動詞であると

断定し、(12 b)は動詞の屈折がないことから動詞ではないと次のように述べている：They argue that “it seems quite counterintuitive to claim that the verb *need* has a defective paradigm in some of its uses but not in others.”

Steele (1978) は不定詞標識の存在があるかないかが AUX 範疇に属するかどうかを決定するのに重要な基準になるとしている。Steele (1978) は、to の欠如は法助動詞と本動詞との間の節の境界線の欠如を示していることになると主張している。さらに、このことは本動詞が助動詞に従属されていないことも示しているとしているとも述べている。

同様に、Palmer (1979) は *needn't* と *doesn't need* の *need* はそれぞれ二つの異なった語類に属しその理由は単純に “the *are* different and an analysis that shows them to be different (as does one that distinguishes auxiliaries and main verb) is more, not less, acceptable than one that does not” と言っている。

確かに、以上の説のように *need* を本動詞と助動詞とに区別して考えることは一番簡単な方法かもしれない。しかし、そのために、答えを得た以上の疑問が生じてこないのだろうか。Heine (1993) は、それらの疑問の一つは言語学的範疇を定義する際の基準に関係してくるとして次のように述べている：第一に、屈折するかしないかが分類化の基本的な基準を構成するということに従う形態素学者の立場がある。Jackendoff (1972) や Akmajian et al.(1979) のような研究者は、数の一致の形態的基準が英語の動詞と非動詞との区別をするのに十分であるとしている。第二に、統語論がより適切な基準になるとしている研究者もいる。Gleason (1955) はどうして助動詞の定義がやや議論の余地のある屈折よりは統語論に大きく頼らなければならないとしている。Palmer (1979 b) も、より明らかな助動詞である *be* や *have* が数の一致を示すことから、形態論が重要な基準になるとは考えていない。代わりに彼は *need* が異なった分類に割り当てる統語的基準を用いている。他の研究はまた助動詞の普遍的な定義には意味論的基準が必要だと考えている。たとえば、Brinton (1988) は統語的

説明を拒否し、意味論的機能的基準を採用して、start、continue、stopなどの英語の相を形成する語が助動詞であると証明している。

3. 文法化 (Grammaticalization) が示唆するもの

3.1 grammaticization

文法化 (grammaticization) とは、一般の語彙項目が文法形態素に発達する過程のことであり、Hopper, P. J. and Traugott E. C (1993) は、次のように定義している：

We define grammaticalization as the process whereby lexical items and constructions come in certain linguistic contexts to serve grammatical functions, and, once grammaticalized, continue to develop new grammatical functions. It is the process whereby the properties that distinguish sentences from vocabulary come into being diachronically or are organized synchronically.

Bybee and Pagliuca (1985) は「法助動詞の意味発達に関する入手可能な歴史的証拠は全てその発達が動作主指向的法性から認識的法性への一定方向の発達である」ことを示している。そして、中野 (1993) が指摘するとおり「英語の法助動詞は、動的法性→(義務的法性)→認識的法性という方向にその意味を発達させてきた」ことは通時的な観点から判断して確かであると思う。また、中野 (1993) は Traugott (1989) による、語の意味の変化の三つの傾向を次のように紹介している。

Tendency I : 外面的状況に基づく意味を表すものから評価・知覚・認識といった人間の内面的な意味を表すものへの発達

Tendency II : 外面的状況からくる要因や話者の内面的要因に基づく意味を表すものから文脈的要素やメタ言語的要素に基づく意味を表すものへの発達

Tendency III : 意味は、命題に対する話者の信念や心的態度という話者の

主観に基づく意味へと発達していく

また、中野 (1993) は、Traugott の指摘している三つの傾向の要因として指摘されている過程には、次のような過程があげられるとしている。

- 1) 一般化 (generalization)
- 2) メタファー的拡張 (metaphorical extension, metaphorization)
- 3) 語用論的強化 (pragmatic strengthening)

一般化とは、語彙項目が固有の特殊な意味内容を喪失し、より一般的な文脈で用い得るよう、より一般的抽象的な意味を持つようになることである。Bybee (1988: 255) は、can の意味の一般化の過程を次のように述べている。

- (i) mental enabling conditions exist in the agent
 - (ii) enabling conditions exist in the agent
 - (iii) enabling conditions exist
- for the completion of the main predicate situation

すなわち、() 心的能力 → () 心的 / 肉体的能力 → () 命題指向的能力という一般化の過程である。同様に、Bybee (1988) は、may の例による法助動詞の認識的用法の発達を次のように説明している。

- (i) physical enabling conditions exist in the agent
 - (ii) enabling conditions exist in the agent
 - (iii) enabling conditions exist
- for the completion of the main predicate situation

Bybee (1988)、中野 (1993) が指摘するとおり、can の本来の意味は心的能力であり、may の本来の意味は、肉体的能力であった。すなわち、上記の過程で示すとおり、動作主指向的な能力の意味から命題指向的な根源的可能性への意

味へと発達してきたのである。中野 (1993) は、現代英語で *can* と *may* の用法に相違が生じたのは、Bybee が指摘するように *may* の意味的变化 () 以降に「命題の表す行為の実行から、命題の真実性へと変化」して、「客観的認識的法性」と「主観的認識的法性」との意味が出現してきたと考えられるとしている。このようにして、他の法助動詞も含めて、その意味を「一般化」や「主観化」に向かって発達してきたのである。

3.2 法助動詞 *can* の肯定平叙文における認識的用法

文法化 (grammaticization) は、*can* が肯定平叙文においても認識的用法を発達させていることを示す有力な仮説である。こうした現象の中で、*can* だけが他の法助動詞に比べて、「主観的認識的法性」の発達が見られないと考えるのは極めて不自然である。当然の事ながら、*can* においても他の法助動詞と同じく文法化の中で主観化が起こってくると考える方が自然である。認識的法助動詞の基本概念の一つである *possibility* は、さらに *epistemic possibility* と *non-epistemic possibility* とに下位分類される。法助動詞 *may* と *can* について考えるなら、13 に示すように、*epistemic possibility* は主に *may* が司り、*non-epistemic possibility* は *can* が司ることは、Table 1 に見られるような Coates (1995) の統計的数値からも明らかである。

13 a. You *may* be right. (認識的用法)

柏野 1993

Table 1 (Coates 1995: 61). The use of *can* and *may* in contemporary spoken English

<i>can</i> : Root Possibility	129	<i>may</i> : Epistemic possibility	147
Ability	41	Permission	32
Permission	10	Root Possibility	7
Undecidable	20	Valediction	1
		Undecidable	13
TOTAL	200	TOTAL	200

13 b. *You *can* be right. 柏野 1993

13 c. I *can* get there in 10 minutes. (非認識的用法)

Informants 1997

当然の現象として、非断定的文脈においては、*can* も認識的用法が存在することは多くの研究が認めている (中野 1993、柏野 1993) が、肯定平叙文の存在については多くの研究において否定されている。たとえば、Palmer (1990)・Leech & Coates (1980)・Sweetser (1990)・Huddleston (1976)・中野 (1993) とも *can* の肯定平叙文には認識的用法は認められないとしている。

ところが最近になって Coates (1995: 64) は、アメリカ英語の口語において、肯定平叙文における *can* の用法が発達しつつあることを認めはじめるとのよう興味深い提案をしているので次に引用する。

- all the other modal auxiliaries in English express both root and epistemic meaning.
- it seems to be the case that epistemic meaning derive from earlier, root meanings (Traugott 1989).
- the evidence from child acquisition research is suggestive: children develop deontic meaning much earlier than epistemic meaning (Stephany 1986).
- the occurrence of merger with examples of *may* illustrates the fuzziness of the root/epistemic boundary in the expression of possibility.
- root and epistemic possibility are only weakly distinguished.

これらの提案は、*can* の肯定平叙文における認識的用法の存在を指示する結果となっている。

ここで、*can* の肯定平叙文における認識的用法の存在を論じる前に、認識的用法の解釈について概観してみたい。Lyons (1977) は、認識的法性は「事柄の知識や信念に関すること (concerned with matters of knowledge or belief)」を述べ、義務的用法は、「道徳的に責任を持つ行為者によって成される行為の可能

性にに対する必然性に関すること (concerned with the necessity of possibility of acts performed by morally responsible agents)」を述べるとしている。Palmer (1990) は、認識的用法を「基本的には、命題が真であるかについての判断をする (essentially making a judgment about the truth of the proposition) もの」とし、義務的用法を「あることからの状態や行為に影響を与える他の状況 (the other being concerned with influence actions, stated of events) に関する」ことを表現するものとしている。また、認識的法性の分析に関する限り、その基本概念は、必然性ではなく、可能性が基本であるとしている。そして、義務的法助動詞は、義務・許可・禁止を表すために用いられ、通常、話者が義務・許可・禁止を与えるという点で、認識的法性同様に主観的であるとしている。また、認識的用法にも義務的用法にも属さないものを動的用法としている。また、可能性 (possibility) については、認識的用法は「It is possible that...」に、義務的用法は「It is possible for..」に書き換えられるとしている。Coates (1983) は、認識的法性は話し手の想定または可能性に関する話し手の査定を表すものであり、表された命題の真実性に対する話し手の自信または自信のなさを表明する場合がほとんどであるとしている。

Lyons (1977: 802) が指摘するとおり、英語の認識的法性の基本概念は、必然性 (necessity) という概念よりも可能性 (possibility) である (in English at least, possibility, rather than necessity, should be taken as primitive in the analysis of epistemic modality) と考えるべきである。この指摘は、Palmer (1979 a) が認識的用法は「It is possible that...」に、義務的用法は「It is possible for..」に書き換えられる、としたテストが一般化していることからもうなずける。先に述べたように、非断定的文脈においては、法助動詞 can の認識的用法が存在することは多くの研究が認めているが、肯定平叙文の法助動詞 can における認識的用法は、一般に認知されていない。しかし、肯定平叙文に用いられた can の文例の中には、it is possible that でパラフレーズされる例を見つけることができる。たとえば、14 a は 14 b に書き換えられる。

- 14 a. Buying a sandwich at a convenience store can sometimes be an adventure.

MANGAJIN No 69 - *Convenience Stores*, p. 12

- 14 b. It is possible that you will find buying a sandwich at a convenience store to be an adventure. Informants 1997

この事実は、14 a における can が認識的用法を表していることを示していることに他ならない。また、14 a は 15 と非常に近い意味を示していることから認識的用法である可能性が非常に高いと言える。

15. Buying a sandwich at a convenience store might be an adventure. Informants 1997

さらに、認識的用法の法助動詞は、“it modal be that-clause”-structure で書き換えられることもわかっている (澤田 1995、Bybee 1985)。次の 16 a・17 a は、それぞれ 16 b・17 b に書き換えることができる。

- 16 a. You must have thought about that. Coates 1983

- b. It must be that you thought about that.

- 17 a. I may have put it there out of the way. Coates 1983

- b. It may be that I put it there out of the way.

すなわち、法助動詞 can が “it modal be that-clause”-structure で書き換えられることは、その can が認識的用法であるということになる。次の例は、“it modal be that-clause”-structure で書き換えられる法助動詞 can の例である。

- 18 a. Buying a sandwich at a convenience store can sometimes be an adventure.

- 18 b. *It can be that* buying a sandwich at a convenience store is

sometimes an adventure.

19 a. This *can* be the answer.

19 b. *It can be that* this is the answer.

20 a. He *can* still be there.

20 b. *It can be that* he is still there.

21 a. This tombstone *can* still be there in your future.

21 b. *It can be that* this tombstone will still be there in your future.

以上の議論から、われわれは、肯定平叙文における認識的用法の *can* の存在を認めることができる。特に、21 a の例は、映画“Back to the Future III”の台詞から引用したものであるが、明らかに命題“this-tomb-stone-still-be-there-in-your-future”の蓋然性の査定を行っている。

4 助動詞研究の今後

いずれにしても助動詞の定義や概念に関する研究を追検証してみると多くの割り切れない矛盾が生じてくる。そして、Heine (1993) は、助動詞に対する次のようなたくさんの疑問を投げかけている。

- a. なぜ時制と相を表す標識は、名詞化や位置補文のために用いられる要素を含みながら、非継続表現を滅多に伴わないのか。
- b. なぜ多くの言語で人称、数、否定、時制の標識が本動詞の屈折として生じないでむしろ助動詞の屈折として生じるのか。
- c. なぜ Greenberg (1963) や Steele (1978) に説明されたような語順の位置に対してある種の制限があるのか。
- d. 時制・相などといった文法的機能標識としての助動詞が、なぜまず第一に動詞的性質を持つ必要があるのか。
- e. 助動詞は、多くの研究者によって主張されてきたように、なぜそれ自身の意味を欠如しているのか。すなわち、助動詞はなぜ語彙的／意味的内容を

もっていないのか。

- f. 助動詞はなぜ頻繁に音声学的に削減された形をもつのか。
- g. 本動詞は、なぜ助動詞の存在する中で不定形節で頻繁に生じるのか。
- h. 助動詞の「両生類的な性格」をどう説明するのか、すなわち、助動詞が明らかに語彙でもなく文法単位でもないことをどう説明するのか。そして、助動詞の多くが本動詞としても文法標識としても同時に用いられることをどう説明するのか。
- i. 同様に、助動詞は当該言語の形態論の一部として扱われるのか統語論の一部として扱われるのか。

上記の h の疑問やその他の疑問のいくらかに対しては、今後、文法化 (grammaticalization) の研究が進むにつれて答えが出てくると考える。h の両生類的な助動詞の性格が、助動詞の議論を複雑にしてきた大きな原因の一つであるが、文法化の枠組みの中でとらえるとき、その性格は理の当然として受け取られることになる。我々が見てきた肯定平叙文における can の認識的用法は、文法化を裏付けていることになるし、文法化によって、将来、肯定平叙文における can の認識的用法の例がもっと豊富に出現してくると考えられる。このことは、助動詞が本動詞と同一範疇で扱われるべきか独立範疇で扱われるべきかという議論を無意味なものにしている。通時的な見地から、現在の助動詞は本動詞から文法化し、現在の意味へと一般化してきているという事実は、助動詞が動詞的な振る舞いをし、かつ、助動詞としての動詞とは異なる概念を有するに至ったことを説明している。われわれは、このことを認めるところから議論を始めるべきであり、理論的枠組みに一生懸命に会わせることにばかり時間を費やすべきではないと考える。

まとめ

第 1 章・第 2 章では助動詞の Autonomy 説と Main-verb 説との対立点を示

してきた。たとえば、中右 (1996) は、助動詞を本動詞として位置づけ、助動詞を動詞の上位に位置し動詞を同一範疇としている。助動詞の本動詞説を提唱している議論を要約すると、だいたい統語論的位置づけから助動詞と動詞を同一範疇として扱っている。また、助動詞が独立した範疇とする考え方の中に、助動詞を普遍的な範疇と考えている研究者がいる。Akmajian et. al.(1979) や Steele et al.(1981) は、二つ以上の異なった言語間で助動詞と動詞が区別されていることが認められることを根拠に AUX を普遍範疇 (universal category) として位置づけている。しかし、大部分の場合、*universal category* という用語が正確に何を意味しているのかを確立することは不可能であり、研究のゆれに表れてきている。つまり、「すべての言語が AUX 範疇を持っているとは限らない」という点に関して、AUX のゼロ表現などという無意味な定義がなされていっそうの混乱を招く結果となっているのである。また、助動詞 Autonomy 説は、助動詞は統語論的にまた形態論的にそして意味論的に見て動詞と同じ範疇と考えることはできないとする説である。

しかし、いずれの説も、理論的枠組みが先にあって、それを適切に説明するために助動詞の所属が決められている。たとえば、Palmer (1983) は、「助動詞本動詞説は論理的モデルに非常に依存している」と述べている。この助動詞本動詞説に対する Palmer の批判は当たっていると思うが、この批判は助動詞独立説を主張する議論にも言えることだと考える。従来 of 研究者の諸説が理論的枠組みに基づきそれに縛られながら議論しなければならないことから容易に判断できる。

Gleason (1955) は、can、could、will、would、shall、should、may、might、must が明らかに英文法内に位置されるべきものであり、それが助動詞の下位範疇として扱われるか、動詞補助として関連する独立範疇として扱われるかは重大な問題ではないとしている。同様に、Dik (1983) は、英語の助動詞 have と be は両方とも屈折の仕方においては動詞に一致しているが、本動詞は語彙目録に由来しているのに対して、助動詞は表現規則を通じて導かれると主張している。

助動詞の本動詞説と独立範疇説に対して、いくつもの代替案が提案されている。その一つに、助動詞漸次説 (gradience) を主張する研究者がいる。この立場では、助動詞と本動詞との間の境界線がないとするものである。そして、その研究領域の一つは Givon (1989) で代表される文法化 (grammaticalization) に関連するものである。これらの立場に共通しているのは、助動詞の性格を共時的な立場からだけとらえようとするのではなく通時的な立場からも説明していこうとするものである。Coates & Leech (1980) では英語の諸用法に対して純粋な通時的漸次モデルを使って説明している。

第4章では、第1・2の議論の助動詞の二重性格 (動詞的性格と助動詞本来の性格) が文法化によって説明がつくことを論じている。また、そのことが第3章によって実証される結果にもなっている。第3章では、助動詞 can が肯定平叙文でも認識的用法が出始めたことを示し、文法化が観察される例として実証している。

本論で提示された助動詞の位置づけや概念についての定義の仕方は、今後、文法化 (grammaticalization) の研究が進むにつれて答えが出てくると考える。両生類的な助動詞の性格が、助動詞の議論を複雑にしてきた大きな原因の一つであるが、文法化の枠組みの中でとらえるとき、その性格は理の当然として受け取られることになる。3章で論じられた肯定平叙文における can の認識的用法は、文法化を裏付けていることになるし、文法化によって、将来、肯定平叙文における can の認識的用法の例がもっと豊富に出現してくると考えられる。このことは、助動詞が本動詞と同一範疇で扱われるべきか独立範疇で扱われるべきかという議論を無意味なものにしている。通時的な見地から、現在の助動詞は本動詞から文法化し、現在の意味へと一般化してきているという事実は、助動詞が動詞的な振る舞いをし、かつ、助動詞としての動詞とは異なる概念を有するに至ったことを説明しているのである。

References & Bibliography

- Abraham, W. (1992). *The aspectual source of the epistemic - root distinction of modal verbs*. Paper presented at the Symposium on Mood and Modality, University of New Mexico, Albuquerque, May 8-10, 1992.
- Akumajian, A., Steele, S. M., and Wasow, T. (1979). The category AUX in Universal Grammar. *Linguistic Inquiry*, 10, 1-64.
- Anderson, J. M. (1973). *An essay concerning aspect: Some considerations of a general character arising from the Abbé Darrigols analysis of the Basque verb*. The Hague: Mouton.
- Bolinger, D. (1976). Gradience in entailment. *Language Sciences*, 41, 1-13.
- Brinton, L. J. (1988). *The development of English aspectual systems. Aspectualizers and post-verbal particles*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bybee, J. L. (1985). *Morphology: A study of the relation between meaning and form*. Amsterdam: John Benjamins.
- Bybee, J. L. (1988). Semantic substance versus contrast in the development of grammatical meaning. *Proceeding of the Fourteenth Berkeley Linguistic Society*, 247-279.
- Bybee, J. L. and Pagliuca, W. (1985). Cross-linguistic comparisons and the development of grammatical meaning. In J. Fisiak (ed.), *Historical semantics and historical word formation* (pp.59-84). The Hague: Mouton.
- Chomsky, N. A. (1957). *Syntactic structures*. The Hague: Mouton.
- Chomsky, N. A. (1981). *Lectures on government and binding*. Dordrecht: Foris.
- Coates, J. (1983). *The semantics of the modal auxiliaries*. London: Croom

Helm.

- Coates, J. (1995). The expression of root and epistemic possibility in English. In J. H. Greenberg et al. (Series Eds.) and J. Bybee. and S. Fleischman (Volume Eds.), *Typological studies in language: Vol. 32. Modality in grammar and discourse* (pp.55-66). Amsterdam: John Benjamins.
- Coates, J. (1996). (Sawada, H., Trans.). *Eigo hojodoshi no imiron*. Tokyo: Kenkyusha. (Original work published 1983)
- Crystal, D. (1980). *A first dictionary of linguistics and phonetics*. London: Andre Deutsch.
- Dik, S. C. (1983). Auxiliary and copula *be* in a functional grammar of English. In F. Heny & B. Richards (eds), *Linguistic categories: auxiliaries and related puzzles: Vol. 2. The scope order, and distribution of English auxiliary verbs* (pp.53-84). Dordrecht, Boston & Lancaster: D. Reidel Publishing Company.
- Edmondson, J. A. and Plank, F. (1976). Auxiliaries and main verbs reconsidered. *Lingua*, 38, 109-23.
- Emonds, J. (1976). *A transformational approach to English syntax*. New York: Academic Press.
- Gazdar, G., Klein, E., Pullum, G., and Sag, I. (1985). *Generalized Phrase Structure Grammar*. Oxford: Basil Blackwell.
- Gazdar, G., Pullum, G., and Sag, I. (1980). *A phrase-structure grammar of the English auxiliary system*. Paper presented at the Fourth Groningen Round Table. Groningen.
- Givón, T. (1989). *Mind, code, and context: Essays in pragmatics*. Hillsdale, New Jersey & London: Lawrence Erlbaum Associates.
- Gleason, Jr. H. A. (1955). *An introduction to descriptive linguistics*. Revised edition, 1961. New York: Holt, Rinehart and Winston.

- Green, J. N. (1987). The evolution of Romance auxiliaries: criteria and chronology. In M. Harris & P. Ramat (eds), *Historical development of auxiliaries* (pp.257-67). Berlin/New York/Amsterdam: Mouton de Gruyter.
- Greenberg, J. H. (1963). Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements. In J. Greenberg (ed), *Universals of language* (pp.73-113). Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Greenberg, J. H. (ed.). (1963). *Universals of human language: Vol. 4*. Stanford: Stanford University Press.
- Heine, B. (1993). *Auxiliaries*. New York: Oxford University Press.
- Henny, F. and Richards, B. (eds). (1983). *Linguistic categories: auxiliaries and related puzzles: Vol. 2. The scope order, and distribution of English auxiliary verbs*. Dordrecht, Boston: D. Reidel Publishing Company.
- Hopper, P. J. and Traugott, E. C. (1993). *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huddleston, R. D. (1976). Some theoretical issues in the description of the English verb. *Lingua*, 40, 331-83.
- Huddleston, R. D. (1984). *Introduction to the grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hudson, R. A. (1976). *Arguments for a non-transformational grammar*. Chicago: University of Chicago Press.
- Jackendoff, R. S. (1972). *Semantic interpretation in generative grammar*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Jackendoff, R. S. (1977). *X' syntax: a study of phrase structure*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Jelinek, E. (1983). Person-subject marking in AUX in Egyptian Arabic. In F. Henny & B. Richards (eds), *Linguistic categories: auxiliaries and*

- related puzzles: Vol. 1. Categories* (pp.21-46). Dordrecht, Boston & Lancaster: D. Reidel Publishing Company.
- Jenkins, L. (1972). *Modality in English Syntax*. Indiana University Linguistics Club: Mimeograph.
- Kaisse, E. M. (1981). Luiseño particles and the universal behavior of clitics. *Linguistic Inquiry*, 12, 424-34.
- Kashino, K. (1993). *Imironkara mita goho*. Tokyo: Kenkyusha.
- Kennard, M. (1997, October 10). Convenience stores. *Mangajin*, 69, 12-15.
- Keyser, S. J. And Postal, M. (1976). *Beginning English grammar*. New York: Harper & Row.
- Langacker, R. W. (1991). *Foundations of Cognitive Grammar, vol. 2: Descriptive Application*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Leech, G. N. (1971). *Meaning and the English verb*. London: Longman.
- Leech, G. N. and Coates, J. (1980). Semantic indeterminacy and modals. In S. Greenbaum, G. N. Leech, and J. Svartvik (eds.), *Studies in English linguistics*, (pp.79-90). London: Longman.
- Lightfoot, D. (1974). The diachronic analysis of English modals. In J. M. Anderson & C. Jones (eds), *Historical linguistics: Syntax, morphology, internal and comparative reconstruction*, (pp.200-17). Amsterdam: North Holland.
- Long, R. B. (1961). *The sentence and its parts*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lyons, J. (1977). *Semantics 2*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Marchese, L. (1986). *Tense/aspect and the development of auxiliaries in Kru languages*. Arlington: The Summer Institute of Linguistics.
- Matthews, P. H. (1981). *Syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McCawley, J. D. (1975). The category status of English modals, *Foundations of Language*, 12, 597-602.

- Mufwene, S. S. (1991). *On the status of auxiliary verbs in Gullah*. Paper presented at the 1991 LSA/SPCL meeting, Chicago, January 3-6, 1991.
- Mufwene, S. S. and Bokamba, E. G. (1979). Are there modal-auxiliaries in Lingala? In P. Clyne et al. (eds), *Papers from the Fifteenth Regional Meeting, Chicago Linguistic Society*, (pp.244-55). Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Nakano, K. (1993). *Eigo hojodoshi no imiron*. Tokyo: Eichosha.
- Nakau, M. (1996). *Principles of cognitive semantics*. Tokyo: Taishukan.
- Palmer, F. R. (1979a). *Modality and English modals*. London: Longman.
- Palmer, F. R. (1979b). Why auxiliaries are not main verbs, *Lingua*, 47, 1-25.
- Palmer, F. R. (1983). Semantic explanations for the syntax of the English modals. In F. Heny & B. Richards (eds), *Linguistic categories: auxiliaries and related puzzles: Vol. 2. The scope order, and distribution of English auxiliary verbs*, (pp.205-17). Dordrecht, Boston & Lancaster: D. Reidel Publishing Company.
- Palmer, F. R. (1986). *Mood and modality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Palmer, F. R. (1990). *Modality and the English modals* (2nd ed.). London: Longman.
- Palmer, F. R. (1995). Negation and the modals of possibility and necessity. In J. H. Greenberg et al. (Series Eds.) and J. Bybee. and S. Fleischman (Volume Eds.), *Typological studies in language: Vol. 32. Modality in grammar and discourse*, (pp.453-72). Amsterdam: John Benjamins.
- Perkins, M. (1983). *Modal expression in English*. London: F. Pinter.
- Puglielli, A. (1987). Auxiliaries in "exotic" languages. In M. Harris & P. Ramat (eds), *Historical development of auxiliaries*, (pp.345-54). New York/Amsterdam: Mouton de Gruyter.

- Pullum, G. K. (1979). *Tule interaction and the organization of grammar*. New York: Garland Publishing.
- Radford, A. (1988). *Transformational grammar: a first course*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ramat, P. (1987). Introductory paper. In M. Harris & P. Ramat (eds), *Papers from the VIIth International Conference on Historical Linguistics*, (pp.3-19). Amsterdam: John Benjamins.
- Ross, J. R. (1969). Auxiliaries as main verbs. In W. Todd (ed), *Studies in philosophical linguistics*, (pp.77-102). Evanston, III: Great Expectation Press.
- Sawada, H. (1995). *Shiten to shukansei: Nichieigo hojodoshi no bunseki*. Tokyo: Hitsuji Shobo.
- Schachter, P. (1983). Explaining auxiliary order. In F. Heny & B. Richards (eds), *Linguistic categories: auxiliaries and related puzzles: Vol. 2. The scope order, and distribution of English auxiliary verbs*, (pp.145-204). Dordrecht, Boston: D. Reidel Publishing Company.
- Steele, S. M. (1978). The category AUX as a language universal. In J. Greenberg (ed), *Universal of human language*, (pp.7-45). Stanford: Stanford University Press.
- Steel, S. M., Akmajian, A., Demers, R., Jelinek, E., Kitagawa, C., Oehrle, R., and Wasow, T. (1981). *An encyclopedia of AUX: a study in cross-linguistic equivalence*. Cambridge: MIT Press.
- Stephany, U. (1986). Modality. In P. Felcher and M. Garman (Eds.), *Language acquisition* (2nd ed.) (pp.375-400). Cambridge: Cambridge University Press.
- Sweetser, E. E. (1990). *From etymology to pragmatics: Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Traugott, E. C. (1980). Meaning-change in the development of grammatical markers. *Language Science*, 2, 44-61.
- Traugott, E. C. (1987). *On the rise of epistemic meanings in English: A case study in the regularity of semantic change*. Stanford University, Linguistic Society of America paper, November.
- Traugott, E. C. (1988). Pragmatic strengthening and grammaticalization. *Berkeley Linguistic Society*, 14, 406-16.
- Traugott, E. C. (1989). On the rise of epistemic meanings in English: an example of subjectification in semantic change. *Language*, 65, 31-55.